

ダロン・アセモグル、ジェームズ・A・ロビンソン著 鬼澤忍訳

『国家はなぜ衰退するのか：権力・繁栄・貧困の起源』上・下

早川書房（2013年）

世界を見渡すと様々な国家がある。その中には生活水準が高い国家もあれば、飢餓に苦しむ貧しい国家も存在する。なぜこのような差が生じるのだろうか。本書では国家の繁栄・衰退のメカニズムが分析されている。

本書には国家の繁栄・衰退を分ける重要な要因が2つあげられている。1つ目の要因が経済制度の違い、すなわち「包括的な経済制度」と「収奪的な経済制度」である。

包括的な経済制度下では、公平な法体系のもの、私有財産は保障されており、人々は自らが生み出した成果を享受することができる。そのため投資やイノベーションを企てるインセンティブが生じ、経済の繁栄が促されることになる。一方、収奪的な経済制度下では、私有財産は保障されず、自らが生み出す成果は認められなかったり、搾取される。このような収奪的な制度下では、人々には投資をしたり、イノベーションを起こすインセンティブが生じない。

2つ目の要因が政治制度の違い、すなわち「包括的な政治制度」と「収奪的な政治制度」である。包括的な政治制度とは、国家が中央集権化されており、政治権力は個人やグループに幅広く与えられている多面的な状態を示す。反対に、これらの条件を伴わない制度が収奪的な政治制度であり、例えば絶対主義のように権力が特定の層に集中している状態を示す。

これら経済制度と政治制度には相互作用がある。例えば、収奪的な政治制度下では、限られたエリート層に権力が集中し、権力の行使に歯止めがかからない。そのためエリート層は収奪的な経済制度を構築し、富を独占しようとする。さらに収奪的な経済制度と政治制度の下では、既存のエリート層が挑戦を受けて敗北した場合、勝者もわずかな制約しか受けないことになる。そのため勝者にも収奪的な政治制度を維持し、収奪的な経済制度を続けるインセンティブが生じる。こうしたメカニズムは収奪的な制度から包括的な制度への移行を妨げる。

経済制度と政治制度の違いが国家の繁栄・衰退を分ける一例として韓国と北朝鮮の事例が紹介されている。韓国と北朝鮮は民族性や言語、地理的位置などの点で均質的である一方、両者には経済的に大きな差がある。なぜならば、韓国には包括的な制度があり、人々は努力や投資によって成果を享受できる一方、北朝鮮では人々にそのようなインセンティブが生じないからである。こうした制度の違いが繁栄・貧困の差を生み出す。

本書に示されている包括的な制度と収奪的な制度による繁栄・衰退のメカニズムの分析を通じて、包括的な制度が社会の発展に重要である一方、収奪的な制度の下での繁栄や成長には限界があることがわかる。本書が出版されてやや時間が経過しているものの、示されている国家の繁栄・衰退のメカニズムは、我々を取り巻く世界情勢や社会の現状だけでなく、その将来を見通すうえで、色褪せることない重要な理論となっている。（中川 敬士）